

石狩の農業 (戦後編 昭和20年～40年)

第二次世界大戦後、日本の農業界には大きな変革がありました。「農地改革」と「農業協同組合法の施行」です。農地改革により石狩町の自作農の数は、改革の前後で大きく変化しました(表1)。農業協同組合法を受けては、昭和23(1948)年、石狩町、石狩町花畔、石狩町生振の3農業協同組合が誕生しました。昭和24(1949)年には、石狩支庁石狩町農業改良相談所が設置され、農業経営改善、農畜産技術改良、生産性の向上等に大きな成果をあげました。また、昭和23年の石狩町農業共済組合の設立により、農業災害の補償も行われるようになりました。

このように農業環境が整う中、畑作・酪農経営をもはや維持することが難しくなっていた農民(石狩の農業一戦前編参照)の起死回生策として、石狩町の各地で造田が進められ、昭和30(1955)年までには、それぞれ、以下のような新田が作られたのです。

■南線地区	昭和24年	250ha
■樽川地区	昭和25年	356ha
■志美地区	昭和25年	220ha
■生振地区	昭和21年～27年	572ha
■北生振地区	昭和27年～30年	631ha

これらの造田のようすや、手掘りで用水路を作り上げた農民たちの苦労は、造田記録映画「砂と闘う」によく描かれています。

その後さらに各地区の造田事業は進められ、昭和39(1964)年には、町域の水稲作付面積が3,370haに達しました(表2)。畑と牧草地だった石狩の平野部は、広大な水田となり、道央の穀倉地に生まれ変わったのです。

また、水稲採種事業でも、石狩町は数々の実績をあげて、全道屈指の産地として認められるようになりました。

(石井滋朗)

表1：第二次世界大戦戦後の農家戸数(単位：戸)

	自作農	自作兼小作農	小作農	合計
昭和12年	196	228	261	685
昭和23年	592	119	90	801

表2：第二次世界大戦後の水田面積の変遷(単位：ha)

	昭和24年	昭和28年	昭和32年	昭和36年	昭和39年
水田面積	1,087	1,447	2,707	3,310	3,370

(表1、2とも 石狩町誌中2より)

(1) 石狩町(1991) 石狩町誌/中2. 石狩市.